

エジプトの歴史

210725

ナイル川は全長6690kmの世界最長の川。

ケニアとタンザニアを国境とするヴィクトリア湖から「大地溝帯」にそって流れ、灰色に濁った「白ナイル」とエチオピアのバハルダールのタナ湖を源流として流れ透明感のある「青ナイル」がスーダンのハルツーム付近で合流し、砂漠地帯を北流してエジプトを流れ、下流に大三角州(デルタ)を作って地中海に注ぐ。

カイロを起点として、そこから北(ナイル川下流、大三角州地帯)を下(しも)エジプト、南のアスワンまでを上(かみ)エジプトと区別している。ナイル川沿いに住み着いた人々が村落を形成し、農耕・牧畜と定住生活を始める。麦と羊、山羊、豚、牛の共通性により西アジアからの伝播と考えられる。

毎年恒例のナイル川の氾濫は、5月から8月にかけてエチオピア高原でモンスーンが大量の雨を降らせるので、夏に氾濫が多くなる。

エジプトは、メソポタミアに遅れて農耕と牧畜が始まった土地であり、ナカダ期になり、都市国家が栄えていった。そのため、メソポタミアは、古くよりエジプトの初期の国家形成に影響を強く与えたきた、とされる。古代エジプトでは、法律的にも、男女平等であった。

①先王朝時代

7000	7,000年前頃から、アフリカ大陸北東部で乾燥化が進行し始め、これに合わせて西部砂漠地帯の住人の生活環境も、年間を通して水があるナイル川流域が中心となって行き、ナイル川流域での農耕の開始をもって新石器時代の開始とされている。
4500	カイロから南西130km離れてカルーン湖には、肥沃な農地がありそこでファイユーム文化がエジプトで初めて農耕・牧畜が導入されたが、これによって生業は多様化したものの、未だ本格的な生産経済に基盤を置く文化であったとは言いきれない。
4500	バダリ文化に属する人々は砂漠の縁辺部に集団墓地を形成し、多量の副葬品を添えて死者を手厚く埋葬する習慣を初めてエジプトに導入した人々であった。遺体は基本的に南に頭を置いて埋葬され、土器や装身具、パレットなどと共に埋葬された。既にこの頃から階層分化が見られるという。
3800	シュメール人から伝わったビールは、大麦から生産が始まり、BC3500頃にワインの生産が始まった。ワイン用のブドウは外来作物で、高貴な酒であった。ビールはパンと並んで主要な食物で、栄養ドリンクだった。当時のビールはアルコール度数が3%程度、製法はパン生地を使った酵母の培養など高度な技法で醸造され、度数が10%で白ワインにも似た味のビールであった。
3300	多くの集落で墓地の廃絶や縮小が確認され大半の墓地で社会階層分化が低下する。一方で中心的な集落遺跡では、他と隔絶する大型の墓が建造されるようになり、これが当時拡大した「王国」の支配者達の物であると考えられる

☞すでに粘土・煉瓦により集団墓地が作られており、お墓文化が進んでいた

②エジプト人による支配

王朝	ファラオ	BC	出来事
1	ナルメル	3125 3062	上エジプト出身のナルメルがエジプト全土を統一。推定人口200万人。スコルピオン2世と同一人物
	ホル・アハ	3062 3000	ナルメルの子
	ジュル	3000 2999	ホル・アハの子。ヒエログリフによる文字体系や、1年を365日とする暦が成立。つまり、1年を太陽の運行に必要な周期とは考えずに、自分達の農業生産物を得る期間と見なして、農業との関係が強いナイル川が増水する時期を、恒星シリウスが日の出の前に初めて出現する時によって予測するようになった。
	ジェト	2999 2977	妻は、メルネイト。埋葬地はアビュドスで、冥府を支配する神オシリス信仰の中心地として知られ、ナイル川の西岸の砂漠にある。太陽神はラーという。両親＝①太陽の神ゲブ②天空の女神ヌト、妻＝③豊穡の女神イシス 兄弟＝④戦いの神セト⑤葬祭の女神ネフティス、子供＝⑥天空の神ホルス
	デン	2977 2951	女王メルネイトの子であり、父親はおそらくジェト。 シナイ半島において、ベドウィンと戦争を行った
	アネジブ	2951 2925	デンの子
	セメルケト	2925 2916	セメルケトの子
	カア	2916 2890	アビュドスには、30×23mにも及ぶ巨大な墓があるが、それらの多くは死体を埋めない記念碑と考えられており民衆の巡礼の対象と成った。

☞ルクソールの北西40kmのアビュドスは、オシリス信仰の中心地で巨大な墓が建設され始めた

③エジプト人による支配

2	ヘテブセケメイ	2890 2847	カアの養子になり、権力を持った
	ラネブ	2847 2808	ヘテブセケメイの子
	ニネチェル	2808 2761	ラネブの子
	ウェネグ	2761 2753	ニネチェルの子
	セネド	2753 2733	ウェネグの子
	セト・ペルイブセン	2733 2716	治世の間に上エジプトと下エジプトの勢力争いが起こり、内乱状態となる
	カセケムイ	2716 2686	アビュドスにある墓は、長さ70m、最大幅17mの不等辺四角形をして特異な形である。黄金と紅玉髓の王錫、金箔の貼られた蓋をもつ水差し等が発掘された。現存する立体的な王の像としては最古のカセケムイ像が二体発掘されており、それぞれ片岩と石灰岩で作製されている。カケムイの墓から900m離れた場所には、同年代のレンガ建造物、シュネト・エル＝ゼビブが発掘されている。この長方形の建物の大きさは長さ123m、幅64mにもなるもので、複雑な内部構造が判明している。

☞【首都】メンフィス 【宗教】太陽神ラー・冥界の神オシリス・その妻イシス 【お墓】煉瓦による建造物が発掘されている

④エジプト人による支配

3	サナクト	2686	2668	カセケムイの娘ニマアトハピは、父の妻であり、サナクトの妻でもあった。 彼の代からシナイ半島の鉱物資源の採掘が行われ、トルコ石、銅という資源がエジプトに富をもたらし、ジェセルによる勢力の拡大と階段ピラミッドなどの巨大建築物が建設された。
	ジェセル	2668	2649	サナクトの弟。宰相イムホテプは、62歳の階段ピラミッドをサッカラに造営する。
	セケムケト	2649	2643	ジェセルの子。サッカラで未完成の階段ピラミッドが発見され、完成していれば土台から七層70mの高さになり、ジェセル王のピラミッドを8m上回る高さになる、と推察された。
	カーバー	2643	2637	セケムケトの子。ギザの2km南方ザウイト・エル・アリヤンにある層状ピラミッドと関係があり、これは未完成のピラミッドで、約42-45mの高さになるはずだが、20mまでしか建設されなかった。
	フニ	2637	2613	カーバーの子。 フニはエレファンタ島に砦を築き、ナイル川の豪雨に備え、エジプトの南海岸を防御した。

☞ファラオの権力を保持するため、親子の交わり、近親婚が記録され始めた。
大地溝帯のシナイ半島の鉱物資源の採掘が始まって富をもたらし、かつ、ピラミッド用に石も採れるようになった。

⑤エジプト人による支配

4	スネフェル	2613	2589	フニの娘ヘテプヘレス1世が、嫁になった。 ヌビア、リビアやシナイ半島に40隻の遠征隊を派遣しレバノンよりスギ材を輸入、最盛期を迎える。 ダハシュールに、5基のピラミッドを建設 父フニのために真正ピラミッドを、すぐそばに自分のピラミッドを、屈折ピラミッドと赤いピラミッドを、メドゥーム近くのセイラにある小さな崩れピラミッドもスネフェルが作った。 スネフェルの作ったピラミッドは、クフの作ったギザの大ピラミッドよりも小さいが、スネフェルがピラミッド建設に使った石の総体積は、全てのファラオの中で最大である。
	クフ	2589	2566	スネフェルの子。甥ヘムオンが、カイロの南西13kmのギザに、傾斜51度の最大のピラミッドを造営した。また、ピュブロスとの接触を図り、銅製の道具と武器をレバノン杉と交換するために遠征隊を派遣しているが、巨大で堅固な葬儀用の船を建造するのに不可欠であった。 またパピルスのうち10枚は非常に保存状態が良く、政府が船員と港湾労働者にどのように食料と道具を送ったか、を説明している。 大ピラミッドの建設関係者メリラーの日記があり、内部の廊下と部屋は磨き上げられて最も堅い花崗岩の壁と天井がある。
	ジェドエフラー	2566	2558	クフの娘ヘテプヘレス2世は、兄カワブと弟ジェドエフラーとも結婚した
	カフラー	2558	2532	クフの娘カメルネプティ1世は、兄カフラーの妻となり、後の王メンカウラー王の母でもある。 ギザに、傾斜53.8度のピラミッドとスフィンクスを造営
	メンカウラー	2532	2504	カフラーとカメルネプティ1世の娘カメルネプティ2世との兄妹婚。 ギザに、スフィンクスとともに傾斜51.2度のピラミッドを造営したが、この頃から王権の衰退が始まる。
	シェプセスカフ	2504	2500	メンカウラーとカメルネプティ2世の兄妹婚の子。 長方形の墓をサッカラに建設し、第4王朝の大きなピラミッドは、建設しなかった

☞【首都】サッカラ南部。周辺国との交易が積極的に行われた。ギザに巨大ピラミッドの建設が行われた

⑥エジプト人による支配

5	ウセウカフ	2498	2491	シェプセスカフの異母姉妹ケンタカウエスの亭主。アブシールに太陽神殿を建設し、サッカラにピラミッドを建設した。太陽神ラーが最高神となり、王の称号に太陽神の息子名が加わる。
	サフラー	2491	2477	ウセウカフの子。サウラーは、 ①パレスチナと重要な貿易関係を持っていて貴重な杉や人々(恐らく奴隷)や品々を得るために複数回の海上遠征を実施し、プント国への遠征も行った。 ②シナイ半島にあるトルコ石と銅の鉱山へ遠征隊を送り、西部砂漠のリビア人の酋長に対する軍事遠征を命じ、家畜をエジプトに連れ帰っている。 ③サフラーの葬祭複合体の主ピラミッドは、規模と品質においてピラミッド建築の衰退を意味している
	ネフェリイルカラー	2477	2467	サフラーの子。この時代はピラミッド建設より太陽神殿の建設の方が重要なのでピラミッドが衰退していったが、第5王朝の中で最大のピラミッド(階段ピラミッド)がメンフィスに建設された。大きさはメンカウラー王のピラミッドの同規模である。
	シェプセスカラー	2467	2460	サフラーの子
	ネフェルエフラー	2460	2453	ネフェリルカラーの長男。20歳前半で死去
	ニウセルラー	2453	2422	ネフェリルカラーの次男。
	メンカウホル	2422	2414	系統は不明である。銅やトルコ石を求めて行われたシナイ半島の鉱山への遠征
	ジェドカラー	2414	2375	ニウセルラーの子。この治世から、太陽神殿が建設されなくなった。王権理念や宗教的な変化を表しており、王権側が太陽神ラー以外の諸神の信仰をも重視するようになった
	ウナス	2375	2345	ジェドカラーの子。エジプト王朝は経済的に斜陽の状況でパレスチナやヌビアとの交易を続け、カナ南南部でも戦闘が行われた。王権の弱体化により、エジプト古国崩壊に繋がる

☞この時代はピラミッド建設より太陽神殿の建設の方が重要なので、手間のかかるピラミッド建設が衰退していった

⑦エジプト人による支配

6	テティ	2345	2333	テティの出生は不明。前王ウナス王の娘のイプト1世を嫁にして、第6王朝を興す。当時、州侯や上級官吏の勢力が増大し、これらの圧力をかわすべく、州侯や上級官吏の娘を妻に娶り内政を安定させた。更に肥大化した行政機構の改革に取り組んだ。しかし王子ウセルカラーのテティの暗殺計画により護衛兵士達に暗殺された。
	ウセルカラー	2333	2332	後妻クイト2世とテティの異母次男。
	ペピ1世	2332	2283	テティ王と前妻イプト1世の長男。妻は娘のメリタテス4世。
	メルエンラー1世	2283	2278	ペピ1世と2番目の妻アンクネスペピ1世との子。彼は自らヌビアに行幸し、ヌビアから臣従の礼を受けるとともに、「南部」の総督となったウェニに対し、五つの運河を掘削させ、ナイル川上流域の水上交通網を整備させた。
	ペピ2世	2278	2184	ペピ1世と3番目の妻アンクネスペピ2世との子。100歳まで生きていたので、3番目の妻が実権を握った。「上エジプト長官」が地方神殿の管理権を手中に収めると第6王朝の影響力は大幅に減退した。ペピ2世が死去する頃には中央集権国家としての実態は有名無実になっていた。彼の死後王位についたメルエンラー2世・ネチェルカラーは、短期間に王位を失っている
	メルエンラー2世	2184	2184	ペピ2世の長男
	ネチュルカラー	2184	2181	ペピ2世の次男

☞ 州侯や上級官吏の力が増大した

⑧エジプト人による支配

7	メンカラー	2181	2180	トリノ王名表の第4列8行のほか、アビュドス王名表の41番目にも刻まれているが、その他に、メンカラーについて言及するものはない。
	ネフルカラー2世	2180	2179	マネトのアビュドス王名表の42番目に刻まれている
	ネフルカラー3世	2179		アビュドス王名表の43番目に刻まれている
8	不明			
9	ケティ1世	2160		ヘラクレオポリス侯だったケティ1世は、上下エジプト全域の支配権を手にして王を名乗った。上エジプトから僅かに発見されるケティ1世の遺物から、彼の権威が他の州侯達に認められていたことが窺われる
10	不明		2134	

☞ 群雄割拠の時期、王権の弱体化が起きた。

⑨エジプト人による支配

11	アンテフ1世	2134	2112	メンチュヘテプ1世の息子で、第10王朝のヘラクレオポリス・マグナの領主たちやアンクティフィら、多くの州知事と権威を争った。王位を継承すると、治世の晩年にはコプトス、デンデラやヒエラコンポリスの3つの州も支配した
	アンテフ2世	2112	2069	北の第10王朝ヘラクレオポリス勢力と領土をめぐる争っていた。アンテフ2世により領土は広がり、国境はテーベより北の第10ノモス付近である
	アンテフ3世	2069	2061	アンテフ3世の孫はメンチュヘテプ3世で、娘のネフェルウ2世は自身の兄弟と結婚した
	メンチュヘテプ2世	2060	2010	各県を治める州侯がメンフィスの中央政府から離反し、全土の覇権を伺う戦乱の時代にエジプトを再統一を行った。治世の後半は、荒廃したエジプトの繁栄を取り戻すために、上エジプト長官など古王国以来の官職を復活させるとともに、新たに下エジプト長官を置くなどして行政機構を整備し、人物の入れ替えを行った。国外への軍事活動は、南方への遠征では第二瀑布までの下ヌビア地方を支配下におさめ、南方にあるプント国(ソマリア地方)へも隊商を送った。西方の砂漠地帯にも軍事遠征が行われ、オアシスに勢力を持ったリビア人を支配下に収めた。
	メンチュヘテプ3世	2010	1998	この頃は既に父王の統一事業によって国力が十分に蓄えられていたため、多数の建築事業を推進し、資材を調達するための遠征も行うなど、安定した時代を継続することができた
	メンチュヘテプ4世	1998	1991	テーベに確立された王権はアメンエムハト1世によるエジプト第12王朝によって引き継がれた

☞ 州侯によりエジプトが再統一され行政機構が整備された

⑩エジプト人による支配

	アメンエムハト1世	1991	1962	衛兵に暗殺され、共同統治の必要性が認識された
	センウセレト1世	1971	1926	父アメンエムハト1世が首都イテ・タウイで暗殺された時、センウセレト1世は西方の砂漠へ遠征に出た。首都の政変を知った彼は、僅かな手勢を率いて一足先に首都へ帰還し、宮廷の混乱をいち早く収束させて単独の統治者となる。 さらに古代エジプト史上初めて砂漠のオアシス地帯へ進出し、一連の遠征で多数の鉱山や採石場が確保された。こうして採掘された資源を元に、エジプト全域で多数の建築事業が行われた。 治世30年目に築かれたオベリスクは、立ったまま現存しているものとしては最古のものである
	アメンエムハト2世	1929	1895	センウセレト1世の子。治世中、湿地帯が広がるファイユーム地方が、食料増産の可能性を秘めた新たな農地として注目されるようになり、大規模な干拓事業が着工された。 堤防を築くことでナイル川からの水の流入を防ぐことが試された一方で、灌漑を効率化するために従来使用されていた運河がより広く深く掘削され、外交による政策も活発に行われた。 イスラエルに使者を派遣して贈り物を交換し、地中海を挟んで北にあるクレタ島とも交流があった。 外国との交流が活発になった結果、アメンエムハト2世の時代以降、エジプトで活動する外国人の数が徐々に増え、発見される遺物にもしばしば外国系の名前が見られるようになる
	センウセレト2世	1897	1878	平穏な時代が続く、ファイユームの農地開発や建築事業など国内の統治に力を入れた。 なお、見つかったパピルス文書から、職人にはエジプト人だけでなく、外国系の民族も多数含まれていた事が判明している
12	センウセレト3世	1878	1841	アメンエムハト2世の子。対外政策に力を入れるべく新たな交易ルートを開拓し、 資源の採掘地を確保するためのヌビア遠征が断続的に行われた 。その一貫として第一急湍に掘られていた運河の拡張工事も行っている。遠征はいずれも成功を納め、センウセレト3世は歴代の王たちの誰よりも広大な領土を獲得し、国境線を押し広げた王となった。 遠征で得られた富の多くは国内の建築事業に充て、カルナックの北にあるメダムードにメンチュ神に捧げる大神殿を建立し、ダハシュールに建造された第12王朝で最大規模の王のピラミッドは底辺が107メートルの建設を行った
	アメンエムハト3世	1842	1797	センウセレト3世の子。アメンエムハト2世の時代から長年継続されてきた ファイユームの干拓事業が完成した 。これにより農業生産は飛躍的に増大し、同時にエジプトの経済成長もピークに達した。主に北のシナイ半島での鉱山開発に向けられはダハシュールとハワラに2基のピラミッドを造営している。 1人の王が複数のピラミッドを築くのは古王国時代のスネフェル王以来の事だった。 うちハワラのピラミッドの近くに建設された巨大な葬祭殿はクレタ島のクノッソス宮殿とよく比較され「本物のラビリントス」などと形容された
	アメンエムハト4世	1798	1786	男子の跡継を残さずに死んだが、次の王朝の最初の2人の王、セベクヘテプ1世とセネブエフは彼の息子だった可能性がある。 彼の跡は、約1500年ぶりの 女性のエジプト支配者となった妹のセベクネフェルが継いだ
	セベクネフェル女王	1785	1782	アメンエムハト4世の没後に政権を握り、約1500年ぶりの女性のエジプト支配者となった。 セベクネフェル自身はアメンエムハト3世の娘だったと考えられ、アメンエムハト4世の異母兄妹の可能性はある
13	セベクヘテプ1世	1782		アメンエムハト4世の子
14	不明		1650	

☞ 共同統治が始まり、安定して成長を始めた。第12王朝209年間で8人のファラオは少なすぎて、マネトの集計が漏れている。

⑪ヒクソス人によるエジプト支配

15	キアン	1650		薄い肌色のアジア系民族ヒクソスが、デルタ地域にアヴァリス市を建設した。
16	アベピ			この頃にエジプトに馬車と戦車(チャリオット)が伝わる。行政機構にまで浸透している
17	イアフヘテプ1世女王	1560	1530	イアフヘテプ1世は生涯を通して長く影響力を行使した。 彼女はしばらくの間、息子のイアフメス1世の摂政の役割を担った。
	セケンエンラー2世	1574	1555	戦場で捕らえられ、後ろ手に縛られ、頭部への激しい攻撃を防ぐことができなかった
	カーメス	1573	1570	ヒクソスのアポピス王との戦いに勝利を収めたが、滅亡させることは出来なかった。

☞ 【首都】ルクソール(旧テーベ)ヒクソスの侵入を受けたアル・リシュト

⑫エジプト人による支配(新王朝時代)

18	イアフメス1世	1570	1546	カーメス王の弟で、エジプトからヒクソスをイスラエルに追い詰めて滅ぼし、ヒクソスと協力関係にあった南のヌビア地方(クシュ王国)も制圧しエジプトの統一者、秩序の回復者としての功績が評価されて、新王朝の創始者として位置づけられている。
	アメンホテプ1世	1551	1524	アメン神への信仰が深く、テーベにアメン神を祀るカルナック神殿を建設した。シリア、ヌビアへの遠征を行った。 ピラミッドの建設技術は、材料の面からも最盛期ほどのレベルに到達することはなく、徐々に衰退し、付属の墓地群などが拡大し、王は王家の谷に埋葬されるようになった。 カイロのエジプト考古学博物館にミイラが展示されている。
	トトメス1世	1524	1493	アメンホテプ1世の子で妻の子で優秀な軍人。アメンホテプ1世の妹で、先王の王女イアフメスと結婚したことで、王の他の実子たちを差し置いて後継者と定められた。その後、クシュ王国も含めて各方面に遠征を行って領土を拡大し第18王朝の最初の絶頂期を現出させた。 シリア地方およびユーフラテス以遠の地カルケミシュ付近を征服したことを祝う記念碑を建てている。しかし、アメンホテプ4世の治世の終わりごろ、ヒッタイトの大王シュツピルリウマ1世がカルケミシュを攻め落とし、息子ピヤシリがカルケミシュ王に封じられてしまった。 宗教政策ではアメンホテプ1世によって後ろ盾としてつけられたアメン神官団と良好な関係を維持し、カルナックのアメン大神殿の造営を継続するなどしている。
	トトメス2世	1493	1479	トトメス1世の下位の王妃の子であったが、正妃の第一王女であった異母姉ハトシェプストと結婚して王位を継承した。即位後は息子が生まれぬハトシェプストの野心を見抜き、側室イシスとの間の子トトメス3世を後継者に指名するがハトシェプストの専横を許すことになる。
	ハトシェプスト女王	1479	1458	父はトトメス1世、母はイアフメス、夫はトトメス2世、娘はネフェルウラー、息子は居ない。 王となった義理の息子トトメス3世は幼かったため、彼女が絶対的権力を保有していた。 公的な場では男装し、あごに付け髭をつけていたと伝えられる。王家の谷に、葬祭殿がある。 なお旧約聖書では、モーセをナイル川で拾って育てた義母は、彼女とも言われている。
	トトメス3世	1479	1425	治世の前半は、ハトシェプストの補佐という形でしか政治を行えず、大半の時間を軍隊で過ごしたと伝わる。この時期の経験から高い軍事的能力を身につけ、ハトシェプストの退位後となる治世の後半は女王時代の外交を改めて周辺諸国に遠征し、国威を回復、エジプト史上最大の帝国を築いた。 ことにBC1457、エジプトとメソポタミアの重要な交易ルートであるメギドの戦いでカデシュ率いるカナン連合軍に大勝で名高い。ナザレの20km南西の平地。 その積極的な外征と軍事的偉業から、「エジプトのナポレオン」とも呼ばれることも多い。 実権を掌握してからはハトシェプストの存在を抹殺しており、ハトシェプストの名前や肖像を軒並み削り取った。これには「恨みによるもの」とした説と「即位した事実を抹消する為」とした説がある。
	アメンホテプ2世	1427	1400	トトメス3世同様に遠征を行い、内政でも見事な手腕を発揮して父が回復したエジプトの国威と広大な帝国を維持することに成功した。陵墓は後に王家の谷と呼ばれる土地に築かれ、後代には王たちのミイラを墓荒らしから守るために安置する場所として使われた。
	トトメス4世	1401	1391	アメン神官団の影響力の排除を試み、相当の確執があったようである。 軍事面ではヒッタイトの危機に対抗するため、ミタンニをはじめとする諸国との間に同盟を締結、シリア方面の情勢を安定させる成果を挙げている。
	アメンホテプ3世	1388	1351	アメン神を崇敬しテーベにカルナックのアメン神殿と直結する分神殿としてルクソール神殿を建設している。このほか、同地に広大な自身の葬祭殿も建設している。葬祭殿は後に後代の王たちによって破壊されたが、メンノンの巨像と呼ばれる彼の坐像は破壊されずに残り、現在でも形をとどめている。 2021年に大規模な遺構が発見された。
	アメンホテプ4世(アクエンアテン)	1353	1336	アテン神を唯一神とする宗教改革を行い、都をカイロとテーベの中間点アクト・アテンへ移す。 死後、ミタンニ王国出身の妻ネフェルティティが実権を握る
	スメンカーラー	1336	1334	アメンホテプ3世の子でアクエンアテンの弟である。
	ツタンカーメン	1333	1324	アメンホテプ4世兄妹夫婦の子で、アメン神信仰を復活させ、都をメンフィスへ移す。
	アイ	1323	1319	王位の血を継がない国王で、アメンホテプ3世の正妃ティイは妹で、兄妹ともにミタンニにルーツを持つ父イウヤの子である。
	ホルエムエブ	1323	1295	高齢だったアイの死後、アイが後継者に指名していた軍司令長官のナクトミンを打倒し、彼が即位した。王女ムトノメジットを娶っていたため、王朝の継続性は維持された。

☞【首都】メンフィス。近親交配により虚弱体質な子を産まれるという証拠がでてこない。

⑬エジプト人による支配(新王朝時代)

19	ラムセス1世	1295	1294	下エジプト出身。ホルエムヘブの忠実な腹心で親友で軍司令官、宰相の地位にあった。息子がなかったホルエムヘブは在位中から彼を後継者に指名していたが老年であったため在位期間は短い。
	セティ1世	1294	1279	ラムセス1世の子で。アマルナ時代の悪政によって低下したエジプトの国力・国威を回復すべく、父ラムセス1世の共同統治者としてシリアへの軍事的対処を行い、父の死後は政策を継いで北方のパレスチナへと遠征しヒッタイトを押し戻すことに成功した。 また南方のヌビアにも遠征し成功を収めたほか、紅海地方で金鉱を発見している。 このほか、リビア人の侵略を撃退している。自身のためにはほかに王家の谷に壮麗な墓を建設している。これらは遠征とともに、諸国にエジプトの国力回復を見せ付ける示威行為であった。世に広く知られるエジプト美術は彼の治世に完成されたものであると言われる。 BC1280頃に、モーゼとアロンが、イスラエル人を率いてエジプトを出国しイスラエルに向かった
	ラムセス2世	1279	1212	パレスチナ地域の帰属をヒッタイト帝国のムワタリ2世とめぐって争ったカデシュの戦いに勝利した。また、 数多くの巨大建造物を築き、約70年間に及んで偉大なファラオとされる。 ヌビアやリビア、そしてアジアなどにおいてエジプト新王国の勢力圏を大いに拡大させることに成功した。それと共に内政と実利外交を追求した。 ヒッタイト帝国の王ハットウシリ3世とは世界初のエジプト・ヒッタイト平和条約を締結した。
	メルエンブタハ	1212	1202	ラムセス2世の子。飢饉が発生したため、リビア人を追い出した。そして、重臣たちの政治的能力を成長させ、 治世中期に起こったリビア人及び海の民の連合軍の侵略に打ち克ち 、6,000人の兵を殺し9,000人の捕虜を得たの侵攻に際しては見事な指導力、危機管理能力を発揮してリビア人の撃破に勝利した。
	アメンメセス	1202	1199	メルエンブタハの異母次男
	セティ2世	1203	1197	メルエンブタハの異母長男
	サブタハ	1193	1187	アメンメセスの子。 当面、タウセルト女王が摂政を行っていた
	タウセルト女王	1191	1189	セティ2世の妃

☞ペル・ラムセスに共同墓地的な王家の谷を建設した

⑭エジプト人による支配

20	セトナクト	1189	1186	ラムセイ3世の父
	ラムセス3世	1186	1155	ベリシテ人と連合した海の民は、船を巧みにあやつり、東地中海沿岸を放浪し、エジプト領内への侵犯を試みた諸集団であるが、勝利できなかった。
	ラムセス4世	1155	1149	側室ティティの子で、 ワディ・ハンママートやシナイ半島の「大地溝帯」の鉱山に大規模な採掘部隊を派遣し、そこで得た資材を用いて、先王たちの築いた神殿群を増築している。
	ラムセス5世	1149	1145	ラムセス4世とその王妃テントオペトの息子
	ラムセス6世	1145	1136	ラムセス3世の子
	ラムセス7世	1136	1129	ラムセス6世の息子
	ラムセス8世	1130	1129	ラムセス6世の弟。 デルタ地域に侵入し、「海の民」を壊滅
	ラムセス9世	1129	1111	ラムセス3世のメンチュヘルケプシェフの息子。埋葬された壁に王の母の称号が刻まれていた
	ラムセス10世	1111	1107	先祖が不明。ミイラも無い
	ラムセス11世	1107	1078	血縁が途絶えタニス周辺を治める有力諸侯で王の娘婿だったネスバネブジェトが後を継いだ

☞リビア人と海の民連合に侵略されるが、撃退した

⑮エジプト人による支配

21	スメンデス1世	1077	1052	太陽神の巫女長ヘルラーが母。ラムセス11世の娘テントアメンと結婚し、王位継承権を得た。
	アメネムニス	1051	1047	前ファラオの子
	プスセンネス1世	1047	1001	上エジプトはテーベを本拠地とするリビア系の将軍たちの支配下におかれる。
	プスセンネス2世	967	943	母がイセトエムケブDで、アメン大司祭国家のパネジェム2世の姉妹および妻

☞【首都】タニス 上エジプトが、リビア系の将軍の支配下に入る

⑩隣国リビア人によるエジプト支配

22	シェションク1世	943	922	リビア人傭兵の子孫で、プスセンネス2世の娘マートカラーを妻とし、軍司令官の地位を得た。また、南方のアメン大司祭国家の権力も手中にしてエジプトを再統一することに成功した。パレスチナに軍事遠征したが、その意図を巡って様々な議論がある。 シェションク1世は、BC945、ユダ王国のエルサレム市を攻撃して圧勝し迫った。ユダ王初代レハブアムは、エルサレム神殿の財宝のほとんどをシェションク1世に対して献上することでエルサレムの破壊を免れたという。次に北イスラエル王国を攻めて初代国王ヤロブアムをメギドまで追い詰めた BC942、シバの女王が、イスラエルに会いに行き、結ばれてメネリク1世が生まれ、エチオピアの皇帝になる。
	オソルコン1世	922	887	首都をデルタ地帯北東部タニスに置き、父と同じくプスセンネス2世の娘マートカラーを妻とし、駐留軍司令官の地位を得た
	シェションク2世	887	885	オソルコン1世の子で共同王になったが、父より先に死亡。
	タケロト1世	885	872	オソルコン1世と王妃タシェドコンスの息子。王妃はカペスで、後継者のオソルコン2世を産んだ。南方のアメン大司祭職が国王就任と密接になってきた
	オソルコン2世	872	837	BC853にオロンテス河畔のシリアのカルカルで、シリア、イスラエル、エジプト軍連合とアッシリアと戦い、敗戦はしなかった
	シェションク3世	837	798	出生不明。タニスを中心とする 下エジプト地域で支配していた
	不明	798	778	
	シェションク5世	778	740	治世の末期、西デルタの諸侯が王国から離反し、上エジプトに王の権威が及ばなくなった。その内の一人であるサイス侯テフナクトは王の死後にファラオを称し、第24王朝を興した
23	不明			
24	テフナクト1世	727	720	下エジプトのサイスを拠点に、リビア人部族の首長によって築かれた。
	バクエンレネフ	720	715	第25王朝のシャバカに殺され、第24王朝は再び遠征してきたヌビア軍クシュ(第25王朝)によって滅ぼされた

☞【首都】下エジプトのタニスからメンフィスに至る地域が拠点。プバステスナパタは、ナセル湖とハルツームのナイル川沿いの中間地点

⑪隣国の黒人王国クシュ人によるエジプト支配

25	ピアンキ	747	716	デルタ地域に進軍し、メンフィスを占拠。現在のスーダンのヌビア地方クシュ国王のピイの指示で、ピアンキが進撃してエジプト全土を制圧し、第25王朝を開いたクシュ王国は、メロエ王国になった
	シャバカ	716	702	弟 全エジプトを再統一する。
	シャバタカ	702	690	シャバタカはアッシリアの脅威を除去するため、パレスチナへ弟タハルカを遠征させた
	タハルカ	690	667	BC671にアッシリアのアッシュールバニパル王により、ナパタの首都まで逃れる。

【クシュ王国の変遷】

☞エジプト第1王朝期に、ヌビア地方(現スーダン)に黒人文明の生存が確認できるが、記録がない。

☞ケルマ王家(BC1900~BC950)・・・BC1500トトメス1世の頃、一時的にエジプトの支配下であった。

☞ナパタ王家(BC795~BC542)・・・エジプトを征服し、第25王朝となった。

☞メロエ王家(BC542~AD400)・・・数百年の間に220基のピラミッドが建設された。エジプトは120基だった。メロエはハルツームの100km北。

⑫新アッシリア帝国支配のもとでサイス王家がエジプト支配

26	ネコ(Nekau)1世	667	664	アッシリアと結んでいたサイスのネコ1世は、クシュの軍勢によって殺害された。
	プサメティコス1世	664	610	ネコ1世の子。土着のエジプト人による最後の繁栄の時代をもたらした。BC663、アッシリアのおかげで王になれたが、アッシリアの衰退により逆に勢力拡大を図った。
	ネコ2世	610	595	BC609にアッシリアが滅亡し、ナイル川と紅海の間に航行可能な運河建設に着手するが未完で終わった。 メギドの戦いで、ユダ王国を破る。 BC605ナブッコ率いる新バビロニア王国・メディア王国・スキタイ連合軍が、 シリア・トルコ国境上のカルケミッシュで、エジプト・新アッシリア残党と戦い、敗北しネコ2世(BC610~BC595)のシリアの進出を防がれた。
	イアフメス2世	570	525	BC609の新アッシリア帝国の滅亡後、45年間の長期にわたり統治して、エジプトを繁栄させたが、BC550にアケメネス朝ペルシャのキュロス2世が建国され、エジプトへの侵攻を狙っていた。後継者のカンピュセス2世がエジプト遠征を開始し、処刑された

☞【首都】サイス。アッシリアがエジプトを征服した後、管理を委ねられたサイスの王家による支配。サイス朝とも言う。

【新アッシリア帝国の変遷】

BC934=アッシュール・ダン2世、その子アダド・ニラリ2世が、全オリエントを支配する帝国を作った。

BC745=ティグラト・ピレセル3世が、イラク、シリア、パレスチナ全域を支配。馬や戦車、鉄器を使用し、残虐行為により勢力を広げた。

BC722=サルゴン2世がイスラエル王国を滅ぼす。ユダ王国は、属国となった。

BC663=アッシュール=バニパル王が、エジプトを征服し、メソポタミアとエジプトを含む、最初の世界帝国を完成させた。

BC612=シン・シャル・イシュクンは、ナボポラッサル率いるスキタイ人・新バビロニア王国・メディア人連合軍に陥落せられる。

BC609=アッシュール・ウパリト2世は、アッシュール市を起点に復権を試みるが、滅亡し、メディア王国のアケメネス朝が支配し始めた。

⑱ アケメネス朝ペルシャによるエジプト支配

27	カンビュセス2世	525	525	アケメネス朝ペルシャ王カンビュセス2世がエジプトを征服し、古代オリエントを統一した。
	ダレイオス1世	522	486	紅海を結ぶ運河が完成
	クセルクセス1世	486	465	サラミスの戦いでペルシャ軍がギリシャ軍に敗れる。息子に暗殺される
	アルタクセルクセス1世	465	424	ペルシャ王朝に対するエジプト人の不満は収まることはなく、プサムテク3世の息子イナロス王子とサイスのアミルタイオスという人物による大規模な反乱が起こる。ギリシャの応援もあり反乱は当初うまくいっていたが、結局は鎮圧されイナロス王子は処刑される。
	ダレイオス2世	423	404	サイスのアミルタイオス(アルタクセルクセス1世の時代にイナロス王子と共に反乱を起こしたアミルタイオスの孫に当たる人物)がペルシャ王朝を破り、再びエジプト人の独立を勝ち取る。

☞【アケメネス朝ペルシャの変遷】

BC550=キュロス2世により建国され、全オリエントを支配する帝国を作った。
 BC518=ダレイオス1世がパンジャーブ・シンド・ガンダーラの北西インドを征服した
 BC479=クセルクセス1世の時代にギリシャ侵攻が失敗した
 BC449=ペルシアはギリシア人の反撃に苦しめ、アルタクセルクセス1世はカリアスの和約でギリシャと講和した
 されていた。
 BC404=アルタクセルクセス2世と小キュロスの間で、皇位継承争いが起きギリシャ軍人を傭兵とした小キュロス軍が敗北した。
 BC330=ダレイオス三世の時代に、アレキサンダー大王に敗れ、滅亡する

⑳ エジプト人による最後の支配

28	アミルタイオス	404	398	BC411、アケメネス朝の王ダレイオス2世(最後のファラオでもある。)に対して反乱を起こした。彼はクレタ人傭兵の力も借りて、BC405にペルシア人をメンフィスから追放した。
29	ネフェリテス1世	398	393	アミルタイオスを殺害し王朝を築いた
	プサムティス	393	393	治世は一年間のみ。ハコルに滅ぼされた
	ハコル	393	380	彼の前任者プサムティスを破った。ネフェリテス2世の父
	ネフェリテス2世	380	380	4ヶ月統治した後、ネクタネボ1世によって除かれ、殺害された
30	ネクタネボ1世	380	362	在位中はアテナイやスパルタから援軍を受け、ペルシアの再征服から王国を守ることに専念していた。紀元前365年ごろから息子のテオスとエジプトを共同統治し、そのまま後継に据えた。
	テオス	362	360	トメス3世を真似てカナンや歴史的シリアに対する攻撃に成功したが、フェニキアへの進出を目前に自国の反乱に追われた
	ネクタネボ2世	360	343	ペルシア王アルタクセルクセス3世率いる軍隊を撃退し、侵入を防ぐが、アルタクセルクセス3世がエジプトを征服し、再びペルシアの支配下に入る。

☞【首都】タニス エジプト人による古代エジプト支配が終わった

㉑ アケメネス朝ペルシャによる第二次エジプト支配

31	アルタクセルクセス3世	343	338	エジプトを二度目のペルシア支配した。宦官に殺害された
	アルタクセルクセス4世	338	336	下エジプトだけ支配したが、父と同じ宦官に殺害された
	カババシュ	338	335	ペルシアに対して反乱を起こし、上エジプトで王位を主張した
	ダレイオス3世	336	332	上エジプトを再び支配したが、総督マザケスは戦わないでアレクサンダー大王に譲渡した

☞アルタクセルクセス3世によって征服されたばかりで、ペルシアの統治が根付いていなかったために、譲渡された

㉒ マケドニア人によるエジプト支配

アル ゲア ス朝	アレクサンドロス3世	332	323	☞エジプト人に解放者として迎え入れられたアレクサンダー大王はファラオとして認められ、アメン神殿に祭られた。アメンはギリシア神話のゼウスと同一視されていた。また、アレキサンドリアを建設した ☞同行していたヘタイラのタイスの進言により、ペルシアのペルセポリスでは、徹底的な破壊を行った。その理由はペルシア戦争時にペルシアがアテナイのアクロポリスを焼き払ったことへの復讐の意味があった。ダレイオス3世は側近のベッソスに殺害されたが、ベッソスも公開処刑された ☞ヘンデルが、オラトリオ「アレクサンダーの饗宴」を作曲している。
	アレクサンドロス4世	323	309	アレクサンダー大王とバクトリアの王女ロクサーネの子

【マケドニア王国の変遷】

・BC338=ピリッポス2世が、アテネ・テーバイ連合軍に勝利し、翌年、コリントス同盟を結成し盟主となった。
 ・BC336=ピリッポス2世が暗殺され、息子のアレクサンドロス3世が即位し、父が開発した新戦術の遺産を受け継いだ。
 ・BC333=父の戦術でペルシアを破り、ギリシャは父が征服していたので、大帝國を手に入れることが出来たが、父親のおかげであった。
 ・BC323=アレクサンドロス3世が、熱病で死去。後継者争いが始まった。
 ・BC309=カッサンドロスは、彼の統治を確実なものにするべく、グラウキアスにロクサーネとアレクサンドロス4世の暗殺を命じ、二人は毒殺された。
 ☞異母兄(庶兄)にあたるヘラクレスとその母バルシネも殺害され、アレクサンダー大王直系は断絶することとなった。

②③マケドニア人によるエジプト支配

プトレマイオス朝	プトレマイオス1世	305	285	<ul style="list-style-type: none"> ☞ディアドコイのうち、殺されずに唯一、天寿を全うした。 ☞3人の女性との間に11人の子がいて、最後に51歳の時に娘を、59歳で2世が生まれた。 ☞うち、アレクサンドロス3世の恋人でもあった遊女のタイスと結婚し、3人の子を産んだ。 ☞ギリシャ風文化であるヘレニズムを、アレクサンドリアに自費で導入し、ギリシャから優秀な学者、芸術家を出稼ぎさせた。マケドニア国王ピリッポ2世の教育の成果である。
	プトレマイオス2世	288	246	<p>プトレマイオス1世とペレニケ1世(ギリシャ人貴族の娘)の子。ファラオとしては後継者を平民から出すわけにはいかないので、近親婚を導入した。</p> <p>ヴェルディがオペラ「アイーダ」を作曲した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ☞「エチオピア国王アモナスロ」は、黒人王国でクシュ王国メロエ王家の国王アマニスロ(BC260ーBC250)が想定され、「アイーダ」はクシュ王国の娘である！ ☞「想定年齢45歳のエジプト国王」は、41歳で姉アルシノエ2世と近親結婚したプトレマイオス2世が想定され、「王女アムネリス」は、シリア国王に嫁入りした娘のペレニケのことか！ ☞ファラオである「王女アムネリス」は、平民「ラダメス」との結婚は不可能なので死を選んだ。 ☞「第3幕のナバタ」は、現在のスーダンにナイル川に面して位置し、当時のクシュ王国の首都であった。 ☞当時のギリシャ人が、肌の黒い人達のことを「エチオピア人」と言っていたことから、「エチオピア国王」となっている。 ☞当時のエチオピアは、現在のエジプト南部からスーダン南部を指し、現在のエチオピアは遙か南になる。
	プトレマイオス3世	246	221	プトレマイオス2世とアルシノエ1世(マケドニア人)の子で、プトレマイオス朝の全盛時代を築いた。
	プトレマイオス4世	221	204	プトレマイオス3世とペレニケ2世(シリア王の孫娘だがマケドニア人)の子。
	プトレマイオス5世	204	180	プトレマイオス3世の2人の姉弟の近親婚の息子である。ナイル川河口の町ロゼッタ・ストーンが建立された
	プトレマイオス6世	180	145	プトレマイオス5世とクレオパトラ1世(シリア王の娘)の政略結婚による子。国の運営が安定した。
	プトレマイオス7世	145	145	叔父のプトレマイオス8世から邪魔もの扱われて、殺害される。
	プトレマイオス8世	171	145	悪女の姪クレオパトラ3世の言いなりになり、甥と息子を殺害したが平穏な死を迎えられた。
	プトレマイオス9世	116	110	悪女の母クレオパトラ3世の言いなりになるが対立し、暗殺容疑で廃位された。
	プトレマイオス10世	110	109	悪女の母と兄が対立し、廃位された。
	プトレマイオス9世	109	107	再度、悪女の母と弟が対立し、廃位された。
	プトレマイオス10世	107	88	悪女の母クレオパトラ5世の言いなりになるのを拒み、BC101に殺害した。弟と和解し姪と結婚したが財宝の略奪で国民の反感を買い殺害された
	プトレマイオス9世	88	81	実弟プトレマイオス10世が殺害されたので、復位した。
	ペレニケ3世	81	80	プトレマイオス9世とクレオパトラ・セレネ1世の娘。弟の10世の共同統治の妻。のちに息子の11世と強制的に結婚させられた後、その19日後に殺される。
	プトレマイオス11世	80	80	プトレマイオス10世の子。ペレニケ3世殺害に怒った群衆により虐殺される。在位80日。プトレマイオス朝直系最後の王。
	プトレマイオス12世	80	51	無能なクレオパトラ7世の父。共和制ローマの意向により娘ペレニケ4世を処刑
	ペレニケ4世	58	55	プトレマイオス12世とクレオパトラ5世の娘。父の国外追放後、母と共同統治
	プトレマイオス13世	51	47	共和制ローマのポンペイウスを暗殺したのでシーザーの怒りを買って、殺害された。
	プトレマイオス14世	47	44	クレオパトラ7世とプトレマイオス13世の弟。邪魔な存在なので、姉に殺害される。
	クレオパトラ7世	51	30	<p>アントニウスがアクティウムの海戦に敗れたので、自殺。プトレマイオス朝滅亡。</p> <p>ヘンデルは、オペラ「ジュリアス・シーザー」を作曲している</p> <p>ペレニケ4世は姉。クレオパトラ7世に殺害された腹違いの妹アルシノエ4世の遺骨は、トルコのエフェソスで発見されているが、ギリシャ系とアフリカ系の混血と推察されている。</p>

☞【首都】アレキサンドリア 【民族】マケドニア人

②④ローマ帝国によるエジプト支配

ローマ帝国	30	395	エジプトはローマ帝国の支配下に入り、属州となる。
ビザンチン帝国	395	641	ローマ帝国が東西に分裂。エジプトは東ローマ領となる。

②⑤イスラム教スンニー派によるエジプト支配

ウマイヤ朝・アッバース朝	639	969	ムスリムに支配される
ファーティマ朝	969	1171	チュニジアで興る
アイユーブ朝	1171	1250	ファーティマ朝の宰相サラディーンが興す
マムルーク朝	1250	1517	奴隷身分の騎兵から興された
オスマントルコ	1517	1882	オスマントルコに支配される
イギリス帝国	1882	1922	英国に支配された
エジプト王国	1922	1952	<p>ファード1世の立憲君主国になった</p> <p>☞AD1939=国王ファード1世の娘ファウズィーヤ王妃(1921-2013)は、イラン国王パフラヴィー2世の最初の妻となった。</p>
エジプト共和国	1952	1956	大統領にナセルが就任
	1956	1970	大統領にサダトが就任
	1970	1981	大統領にムバラクが就任